

III 発掘調査

1 十三稻荷山塚群（平成21年度）

- ①所在地 石岡市南台3丁目1165-1ほか ②調査面積 約60m² ③調査日 平成21年4月13日～15日
 ④調査原因 個人住宅建設 ⑤調査担当者 谷伸俊雄 ⑥調査概要 十三稻荷山塚群は山王川左岸のやや内陸部に位置し、径9m前後の塚3基によって構成される（遺跡番号08-205-160）。『埋蔵文化財包蔵地調査カード』（2000年2月調査）では「字十三稻荷山と字十三の字境」に立地することから「境塚」とされたが、『石岡市遺跡分布調査報告』（2001年）では「十三塚」とされた。時期はともに「近世」とされている。周辺には八幡塚群や木戸口塚、貝柄塚群といった近世の塚（群）が点在している（図1・2）。

個人住宅建設に伴い、工事主体者より「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」照会文書が平成21年2月11日に提出された。市教育委員会は、



図1 十三稻荷山塚群 位置図 (S=1/15,000)



図2 十三稻荷山塚群 調査地点位置図 (S=1/5,000)

工事によって影響を受ける可能性のある十三福荷山塚群の2号塚、3号塚について測量調査および試掘調査を2月25日～3月10日に行った。その後、工事主体者より3月13日付で茨城県教育委員会あて「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出され、茨城県教育委員会より3月26日付で、工事着手前に発掘調査を実施するように通知があった。これらを受け、工事によって影響を受ける2号塚および3号塚について、4月13日より調査を開始し、4月15日に終了した。

調査は以下のような工程を行った。まずは塚の現状での規模・形態等を把握するため、①25cmセンターによる測量調査を実施した(図3)。次に、塚が古墳あるいは古墳を再利用したもののかどうかを確認するため、②塚の裾付近に幅1m程度のトレンチを設定し、周溝の有無の確認を行った。その結果、2号塚・3号塚とともに周溝は確認できず、遺物も出土しなかった。そこで、③トレンチを塚部分にも延長し、慎重に掘り下げを行った。その結果、2号塚・3号塚ともに石棺等はもちろん、墓坑といった埋葬施設に関するものは確認されなかった(図4)。これらの所見から、古墳あるいは古墳を再利用した塚である可能性は低いと判断し、④塚全体の盛土の掘り下げを行った。最後に、⑤盛土下の遺構の有無を旧表土およびローム面において行ったが、確認されなかった。



写真1 2号塚調査風景

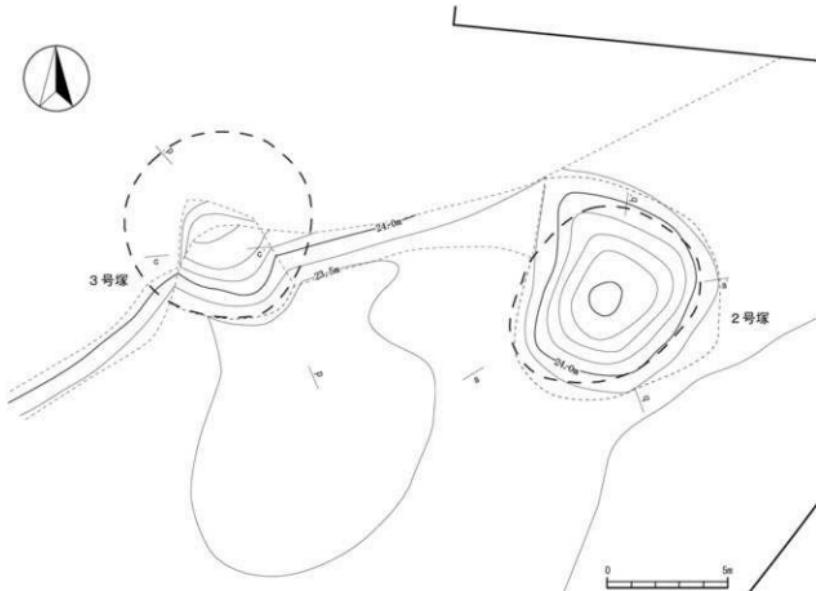


図3 十三福荷山塚群(2号塚・3号塚)測量図(S=1/200)

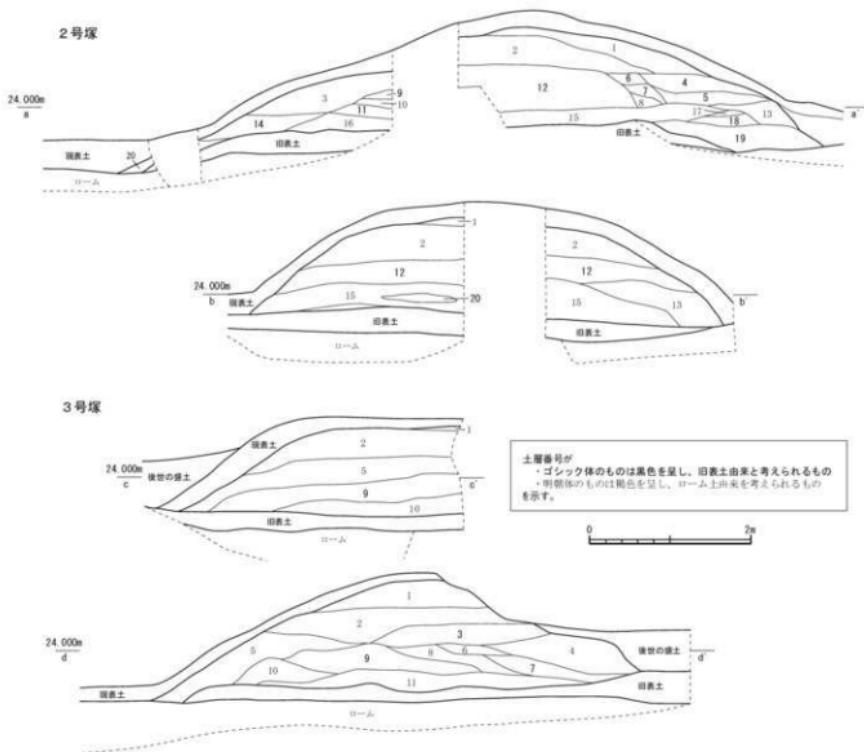


図4 十三稲荷山塚群（2号塚・3号塚）セクション図（S=1/60）

測量・発掘調査の結果をもとに規模をまとめると、2号塚は東西径8m、南北径6m、高さ1.8m程度の楕円形、3号塚は径6m、高さ1.5m程度の円形と考えられる。

盛土の状況は、2号塚・3号塚とともに、①中心部に核となる盛土をまず行い、次にそれを包むように行う、②黒色土（旧表土由来か）と褐色土（ローム土由来か）を互層状に行う、という点が観察できた。だが、盛土はいわゆる古墳のような堅固なものではなく、また盛土中からも遺物は出土していない。

⑦まとめ 遺物の出土はなかったものの、周溝・埋葬施設がないこと、盛土は古墳のような堅固のものではなかったことから、2号塚・3号塚はやはり古墳でなく塚と考えられる。そしてその性格は、「十三」あるいは「十三稲荷山」という字名を重視すれば、十三塚と考えるのが穩当であろう。



写真2 全景（南西から）



写真3 2号墳（西から）



写真4 2号墳南北セクション（西から）



写真5 2号墳 南北セクション（東から）



写真6 3号墳（南から）

2 中坪遺跡（平成22年度）

- ①所在地 石岡市東大橋1493ほか ②調査面積 約12m² ③調査日 平成22年9月14日～15日、10月15日
④調査原因 市道A4166号線改良工事 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 中坪遺跡は園部川南岸の台地上から台地縁辺部に所在する（遺跡番号08-205-092）。市道A4166号線改良工事に伴い「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」照会文書があり、市教育委員会では平成22年8月25日に試掘調査を行った。開発区域内に11ヶ所の試掘トレンチを設定し遺跡の有無を確認したところ、T-3において奈良・平安時代と考えられる堅穴住居跡を確認した。石岡市長より9月1日付で茨城県教育委員会あて「埋蔵文化財発掘の通知」が提出され、茨城県教育委員会より9月10日付で、遺構の検出された部分については工事着手前に発掘調査を実施するよう通知があった。これらを受け、遺構の検出されたT-3を中心とした発掘調査を9月14



図5 中坪遺跡 位置図 (S=1/25,000)

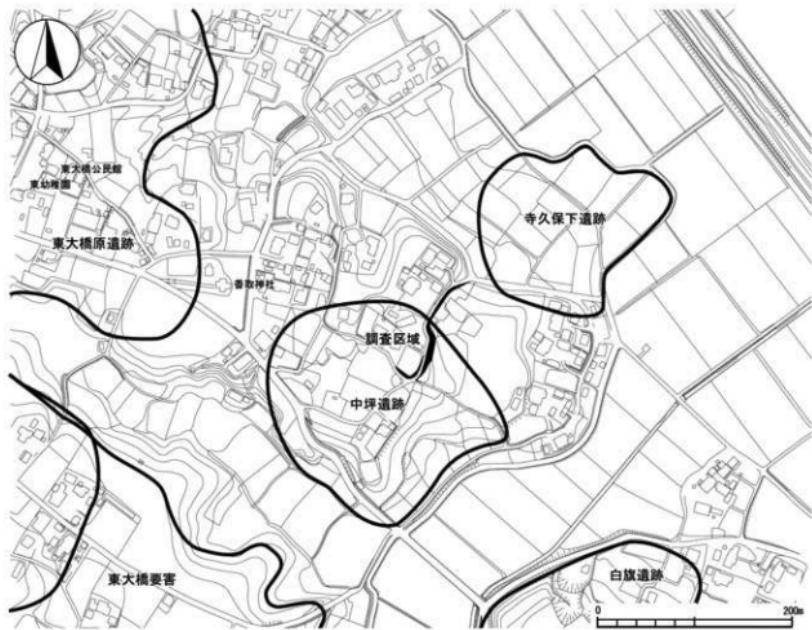


図6 中坪遺跡 調査地点位置図 (S=1/5,000)

日より着手し、9月15日に終了した。10月15日には発掘調査区域周辺の工事立会いを実施したが、新たな遺構・遺物は確認されなかった。

発掘調査は、試掘調査で遺構が確認されたT-3を中心に6m×2mの調査区を設定した。表土剥ぎおよび埋め戻しはすべて人力で行った。調査区内はトレンチャによる搅乱が激しかつたものの、T-3で確認されていた竪穴住居跡(SI01)のはか、竪穴住居跡のカマド2基(SI02・03)を検出した。SI02・03については別住居として扱ったが、カマド部分のみの検出であり、同一住居におけるカマドの造り替えの可能性も考えられる。切り合ひ関係からはSI03→SI02と判断できる。

SI01はカマドと北東部分が検出できただけだが、ほぼ南北主軸と考えられる。カマドが東壁中央部に付設されていたとすると、辺3.5m程度に復元できる。小片のため図化はできなかったが、奈良・平安時代の須恵器片が出土している。

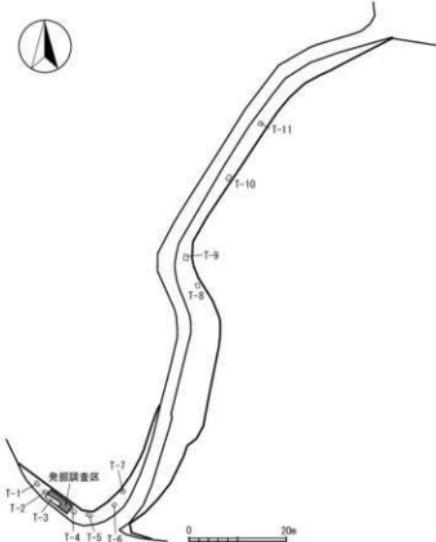


図7 中坪遺跡 全体図 (S=1/1,000)

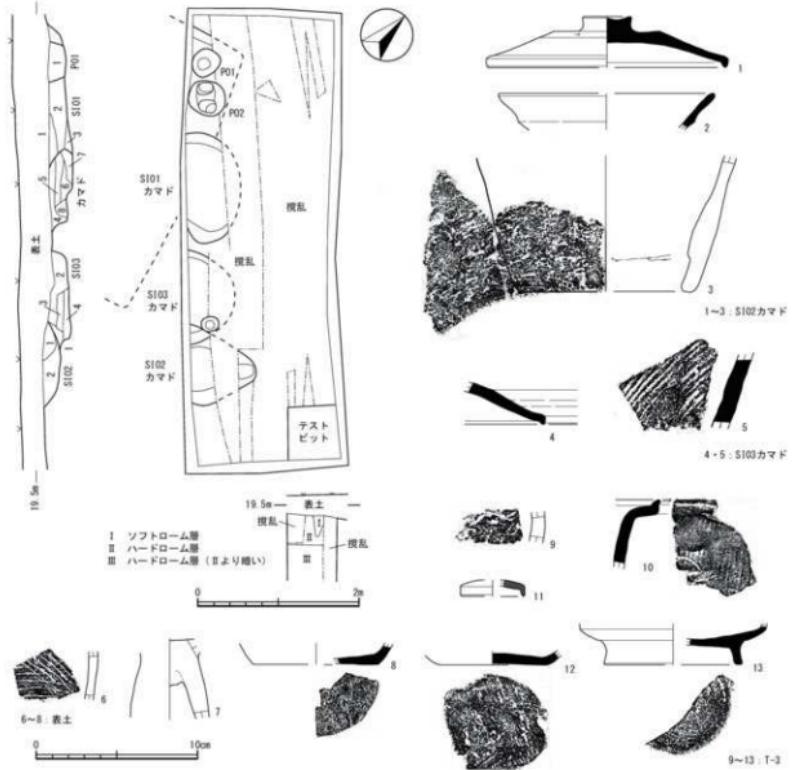


図8 中坪遺跡 発掘調査区 (S=1/60)・出土遺物 (S=1/3)

⑦遺物 1～3はSI02カマド出土。1は須恵器の蓋。口径147mm(復元)、器高31mm。灰褐色～褐色。白雲母多量、白色粒・黄褐色色粒・半透明粒少量含む。焼成不良。20%残存。2は須恵器の壺。口径133mm(復元)。暗灰色。白色粒・半透明粒・砂粒少量含む。焼成良好。10%残存。3は土師器の瓶。暗赤褐色～橙褐色。白色粒・半透明粒多量、砂粒・黒雲母少量含む。焼成やや不良。4・5はSI03カマド出土。4は須恵器の蓋。灰色。白色粒・黄褐色色粒少量含む。5は須恵器の壺。灰～暗灰色。白色粒多量、白雲母・半透明粒・黄褐色色粒少量含む。6～8は発掘調査区表土出土。6は弥生土器の壺か。暗褐色～褐色。白色粒・半透明粒・角閃石少量含む。7は土師器の高壺。橙褐色～褐色。白雲母・黑色粒・黄褐色色粒少量含む。8は須恵器の壺。灰色。白色粒・半透明粒・黄褐色色粒少量含む。焼成良好。9～13はT-3出土。9は繊維を含む縄文時代前期の土器。外面暗赤褐色、内面淡褐色。黄褐色色粒少量、白色粒微量含む。10は須恵器の壺。褐色。白雲母多量、白色粒・黄褐色色粒含む。焼成不良。11は縄文陶器の合子蓋か。灰オリーブ～灰白。胎土精良。透明粒・黑色粒微量含む。20%残存。12は須恵器の壺。灰～灰褐色。半透明粒多量、白雲母・白色粒・砂粒少量含む。13は須恵器の高台付壺。灰色。白色粒多量、黄褐色色粒・黑色粒少量含む。焼成良好。30%残存。T-3はSI01およびSI03の位置にあたり、奈良・平安時代の遺物についてはそれぞれの住居跡に帰属していた可能性が高い。以上、堅穴住居跡の帰属すると考えられる奈良・平安時代のはか、縄文時代前期や弥生時代、古墳時代の遺物も出土している。

⑧まとめ 市道拡幅部分の12mの発掘調査ではあったが、奈良・平安時代の堅穴住居跡3軒を検出した。これが中坪遺跡における初めての発掘調査だが、検出した住居跡は重複しており、継続的に営まれた集落遺跡である可能性が高い。また、團部川をはさんだほぼ対岸にある小美玉市高原城では、灰釉陶器や転用硯が出土しており、水上交通の中繼地点の可能性が指摘されている（小美玉市史料館2010）。石岡市と小美玉市と現在の行政区分は異なるが、「團部川」をキーワードに奈良・平安時代史、ひいては地域史を構築していく必要があるだろう。

<引用文献>小美玉市史料館 2010「発掘調査 高原城」『小美玉市史料館報』第4号



写真7 全景 (南から)



写真8 全景 (北東から)



写真9 SI01 確認状況 (北東から)



写真10 SI02・03 確認状況 (北東から)



写真11 テストピット (西から)



写真12 試掘調査風景

IV その他の調査

1 大増（未周知）

大増地区的顕徳院周辺において採集した土器を紹介する。土師質土器の皿で、口径96mm（復元）、器高35mm、底径44mm。淡橙褐色。黒雲母（極小）を含むほか、黄褐色粒少量、白色粒微量を含む。17世紀の所産と考えられる。

顕徳院（菩提山大学寺顕徳院）は真言宗智山派の寺院で、弘治3年（1557）に古尾谷隣岐守の祈願所となり、明暦年間（1655～58）には毛利備前守が支配したという（関2003）。古尾谷氏は南西の丘陵上に所在する大増城（八幡平城）の城主とされている。境内には天保5年（1834）3月銘の男女講中の建立した弘法太子塔などがある。

大増地区は江戸時代には常陸府中から日光へと通じる宇都宮街道の宿場町として栄え、顕徳院は加波山押定の出発点になったとされる（八郷町史編さん委員会2005）。

今回の資料は、江戸時代前期の大増地区、顕徳院の様相を示す一資料といえる。

＜引用文献＞関 竜2003『八郷町の

地名』八郷町教育委員会

八郷町史編さん委員会2005

『八郷町史』八郷町



図2 土器 (S=1/3)



図1 大増 位置図 (S=1/15,000)

2 染谷27号墳（薬師堂古墳）

染谷古墳群は総数41基からなる古墳群である。染谷27号墳（薬師堂古墳）の墳頂部において採集した遺物を紹介する。1は突帯を有する円筒埴輪の胴部片。外面橙褐色、内面暗褐色。白色粒・黄褐色粒を含むほか、半透明粒を微量含む。焼成良好。外面はタテハケ調整後、突帯貼り付けに伴うヨコナデが施される。内面はナデ調整。

2は土師質土器の皿。口径66mm（復元）、器高19mm、底径40mm（復元）。褐～淡褐色。黒雲母多量、白色粒少量、黄褐色粒微量含む。油煙付着。

染谷古墳群で発掘調査が行われた4基の主体部は横穴式石室（石棺系石室）であり、墳形は不明の1基を除くと方墳であった。また、埴輪は確認されていないことから、終末期を中心とした古墳群と考えられていた（箕輪1995、曾根2010）。今回報告した埴輪片は染谷古墳群においてはじ



図3 染谷古墳群



図4 染谷27号墳（薬師堂古墳）採集遺物 (S=1/3)

めて採集された埴輪となり、採集された染谷27号墳（薬師堂古墳）に伴うとすれば、染谷古墳群の造営は古墳時代後期にまさかのぼることになる。染谷27号墳（薬師堂古墳）は径40m、高さ4mを測る群内の最大規模墳であり、古墳群の南西端に独立的に存在していることを考えると、染谷古墳群の嚆矢的存在と位置付けることも可能である。一方で染谷古墳群内においては古墳時代前期の方形周溝墓も検出されており（安藤1994）、田中裕が整理した「前期の小規模方墳（方形周溝墓）と中期後半ないし後期の古墳群が、隣接ないし近接して存在する」という事例に該当する（田中2010）。さらには、ほとんどが未調査墳であることを加味すると、前期から終末期までの継続的な古墳群である可能性も残る。古墳群の継続性や、採集された埴輪の詳細な年代的位置付け等については今後の課題としたいが、染谷古墳群において円筒埴輪片が採集された意義および古墳群の造営時期が終末期に限定されるものではなくたった点を強調しておきたい。

染谷27号墳（薬師堂古墳）の墳頂には薬師堂が存在しており、付近の個人宅には南北朝時代の薬師如来像が祀られている。墳頂や古墳周囲には五輪塔が数多く存在し、室町時代前期にまさかのぼる（黒澤1996）。2の土師質土器の皿は油煙が付着しており、灯火具としての使用が想定されることから、「古墳につくられた中世墓」あるいは「古墳が仏教環境に改められた」（千葉2005）時期を考えるにあたっても重要な一資料といえる。

<引用文献>

安藤敏孝1994『二子塚遺跡発掘調査概報』石岡市教育委員会

黒澤彰哉1996『石岡の石仏』石岡市教育委員会

曾根俊雄2010『石岡市域の古墳群』『常陸の古墳群』六一書房

田中一裕2010『「常陸」というフィールドから「古墳群」を考える一総括に代えてー』『常陸の古墳群』六一書房

千葉隆司2005『小田氏の仏教と中世墓—霞ヶ浦沿岸の古墳につくられた中世墓の分析をとおしてー』『婆良岐考古』第27号

箕輪健一1995『道祖神古墳発掘調査報告（染谷古墳群の調査）』石岡市教育委員会

V 石岡市内出土旧石器時代資料の観察・分析報告

窪田 恵一

下ノ宮遺跡（旧正月平遺跡）の旧石器（第1図1）

本資料は1973年刊行の『常総台地における先土器時代資料(一)』を初出報告〔金子・川崎・渡辺 1973〕とする旧石器時代資料であったが、2000年に始まる茨城県考古学協会主催の旧石器時代シンポジウムの検討作業時点で所在不明となっていた資料である。2012年3月に宮部遺跡出土資料を観察した際に同遺跡の収納コンテナ内に紛れ込んでいたことに気付き、改めて正月平遺跡採取資料として再確認できたことから、今回観察作業をさせていただいた報告である。

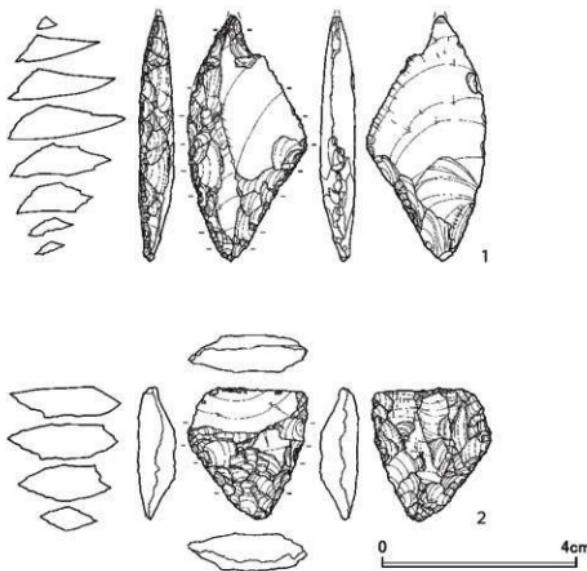
本資料の規模は長さ49.9mm、幅24.4mm、厚さ6.9mm、重量6.57gで、石材は内部が灰黄色（2.5Y 6/2）に黄褐色（2.5Y 5/3）の変色部位が表皮状に接する房総半島南部の白淹没頁岩で、変色部位の有り様から素材原石の表皮に近い部位を使用したと考える。比較的大振りな剥片を使用した様で腹面基部寄りに素材剥片の打痕裂痕（バルバスカーナ）が残る。左側縁は緩やかに弧を描くように成形されていて、調整剥離はすべて腹面側から施す。こちらの調整作業は押圧剥離であると考える。右側縁は張り出すように成形されていて、張り出し端部から基部寄りは背腹両面に調整剥離を施して僅かに抉り込む様に成形している。腹面側の調整剥離末端はすべてが蝶番状剥離となり、押圧剥離ではなく打撃による剥離であると考える。刃部に当たる部位は素材剥片の縁辺を残し、楕円状剥離は施していない。全体では、右に大きく張り出す切り出し状となり左右非対称形である。右側縁先端側の剥離は過去の剥離であって、最近の欠損ではない。また先端の折損部位は背面から腹面に入力が抜けた蝶番状剥離となっている。成形状況から本資料は東内野型有柄尖頭器とし、石材が白淹没頁岩であることから房総半島から完成品として搬入されたと考える。

茨城県域で有柄尖頭器は山地を除く県内全域で確認されているが、東内野型有柄尖頭器は分布域が県南部に偏っている。東内野型有柄尖頭器を研究された道澤明氏の論文〔道澤 1994〕が大いに参考となるが、道澤編年の第4段階に該当する資料は本資料の他に行方市（旧北浦町）木工台遺跡例〔荒井・高野1999・窪田2006〕があるくらいで確認数は少ない。第4段階の石器の特徴は、刃部が大きく張り出すが楕円状剥離が無く切り出し形状が形骸化している点にある。筑波山南麓の平野域は東内野型有柄尖頭器の分布域としては外縁北部に当たる地域であり、加えて当該資料の数少ない最終段階の検討資料であることから、下ノ宮遺跡資料は貴重であり今後の調査で遺跡の内容把握が進み関連資料が発見されることを期待したい。

半田原遺跡出土の黒曜石製旧石器の産地推定（第1図2）

半田原遺跡は1995～1996年に県道改築工事に伴い財團法人茨城県教育財團で発掘調査が実施された遺跡で、立川ローム考古学層序第Ⅳ層下部から約1,800点の石器が出土した〔仙波1997〕。ホルンフェルスと那珂川流域産黒色安山岩を多用し、基部加工のナイフ形石器を主体にした石器群で石器製作に使用した敲打器が多数含まれている。また董青石の結晶が数mm角まで晶出したホルンフェルスを用いた打製石斧も共存する。同じ董青石ホルンフェルスは他の使用例が土浦市（旧新治村）本郷原山五反田遺跡に1例（石核）しか確認できていない（註1）。董青石の結晶サイズが、石器製作者の理想とする剥片剥離において破碎や折損の様な製作障害となるほど大きく成長し、石器製作には不向きな石材と捉えられていたと考える。この董青石ホルンフェルスは筑波山東麓付近に限定的な使用を想定する石材で、つくば市東部から土浦市北西部や石岡市西部の筑波山麓部周辺において石斧などの礫核石器に用いられた間連資料の発見を予測している。

旧石器時代資料中に黒曜石を使用した石器が1点含まれていたことから、2007年に国立沼津工業高等専門学校



第1図 石岡市内出土の旧石器実測図 (S=1/1)

表1 半田原遺跡黒曜石製石器産地推定結果

分析No.	遺跡名	器種	推定産地	判別分析					
				第1候補産地		第2候補産地			
				判別群	距離	確率	判別群	距離	確率
IBK07-40	半田原遺跡	台形様石器	神津島恩馳島群 KZOB		9.21	1	WOMS	128.09	0

元教授望月明彦氏に御協力いただき蛍光X線による産地推定作業を実施した。分析終了後「石岡市報」2008年9月に分析結果を簡単に紹介したが、改めて報告する機会を頂いたので報告する。分析方法の詳細は『山川古墳群(第2次調査)』の望月報告[望月2004]に掲載。分析の結果は東京都伊豆諸島の神津島恩馳島群(KZOB)産である(分析番号: IBK07-40・表1参照)(註2)。

分析した資料の規模は長さ27.3mm、幅24.4mm、厚さ7.3mm、重量4.45gで基部側の背腹両面・両側縁から押圧剥離により尖端様に成形している。腹面の末端は背面に入力が抜ける蝶番状剥離が認められ、素材剥片生産時に生じたと考える。全体に黒色不透明だが、部分的には着色ガラス状で透明感が強い箇所もある黒曜石である。

後期旧石器時代前半のX層段階からIX層段階にかけて製作されている台形様石器は、那珂川下流の武田遺跡群において玉髓や頁岩類を使用し、運用形態は原石の搬入から製品の生産まで確認されている。黒曜石を使用した台形様石器は県南部を中心に分布するが、石材の運用形態では原石の搬入から成形が確認できた資料はなく、すべて完成品として搬入されたものと考える資料である。現在までに4点(土浦市1点、かすみがうら市1点、下妻市1点、石岡市1点)確認しており、全て望月明彦氏によって産地分析が実施されている。産地の内訳は土浦市寺畠遺跡・かすみがうら市富士見塚古墳例[川口2000]の計2点は栃木県高原山甘湯沢群産(THAY)で、下妻市(旧千代川村)西原遺跡例[石川2000]は蓼科冷山群産(TSTY)と当遺跡資料の神津島恩馳島群となる。

後期旧石器時代前半のX層段階からIX層段階という新人段階の活動開始初期でも、茨城県には関東平野周辺の

山岳地域ばかりか島嶼地域産黒曜石の搬入が確認され、茨城県域で活動していた旧石器人集団にも海峡を挟んだ遠隔地黒曜石産地の情報が早くから知られていた事を示す事例と考える。しかし島嶼地域を含めた伊豆・箱根産黒曜石が旧石器時代を通じて茨城県域に次々に持ち込まれることは無く、本格的に洞片石器生産に使用されることになるのは縄文時代中期前半まで待たなければならなかつた様だ。

半田原遺跡を形成した旧石器人は石器製作に用いる石材の大半を県内で得ていたが、黒曜石の入手のみを遠く離れた南方海上に位置する伊豆諸島産とした。後期旧石器時代を通じて伊豆諸島と本州が陸続きとなつたことは無いため渡航には外洋航行用の船を使用せざるを得ないが直接現地まで赴いて採取活動したとは考えにくく、関東平野南部地域に活動していた他の旧石器集団との交流から入手したと考える。3万6000年前頃から黒曜石各産地の質に対する意識が如何様であったかは不明だが、茨城県域からは決して見えなかつた南の島の黒い石がどのように旧石器人の目に映つたか想像すると興味が尽きない。

今回の分析では、それまで想定もしていなかつた伊豆諸島産黒曜石が茨城県内陸部にまで搬入・使用されていたことが判明したことは衝撃的な結果であった。今後の産地分析作業が進展すると、近傍の栃木県高原山産以外の他産地黒曜石の更なる使用実態が判明する可能性を考慮しながら観察・分析を継続しなければならないことを思い知らされた結果であった。今回の報告の機会を与えていただいた小杉山大輔氏と分析作業を実施していただいた望月明彦氏には感謝申し上げる。

(註1) 報告書では第6号住居跡に敲打器と文章記載はあるが、実測図は掲載されていない。

(註2) 第2候補産地の記号「WOMS」は長野県和田岬の「和田牧ヶ沢群産」である。

【参考文献】(著者50音順・敬称略)

- 荒井保雄・高野節夫1999『北浦複合団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 木工台遺跡2』茨城県教育財团文化財調査報告第152集 茨城県 財团法人茨城県教育財團
- 石川太郎2000『Ⅲ. 旧石器時代』『西原遺跡発掘調査報告書』千代川村埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 5-20頁 千代川村教育委員会
- 金子 進・川崎純徳・渡辺 明1973『茨城県における先土器時代資料(一)』常総台地研究会
- 川口武彦2000『霞ヶ浦町内出土先土器時代石器群の検討』『婆良岐考古』第22号 75-95頁 婆良岐考古同人会
- 窪田恵一2006『茨城県南東部・行方台地の旧石器一潮流市今林遺跡・行方市木工台遺跡の資料を中心に』『茨城県考古学協会誌』第18号 1-26頁 茨城県考古学協会
- 仙波 亨1997『一般県道石岡つくば線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 半田原遺跡』茨城県教育財团文化財調査報告第122集 茨城県 財团法人茨城県教育財團
- 道澤 明1994『東内野型尖頭器の出現と変遷』『古代文化』第46巻第12号 14-32頁 財團法人古代學協會
- 望月明彦2004『付編2. 土浦市内遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定』『山川古墳群(第2次調査)一土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』第8集 122-126頁 土浦市 土浦市教育委員会 山川古墳群第二次調査会

VI 茨木遺跡2号住居出土の暗文土師器について

高橋 透

1. はじめに

茨木遺跡（現在は「税所屋敷遺跡」に名称変更されているが、本稿では「茨木遺跡」と呼ぶ）は石岡市南東部の高浜入に近い恋瀬川を望む石岡台地上に位置し、北西約400mのところには古代寺院跡の茨城庵寺跡、南東約500mには6～8世紀の集落遺跡である田崎遺跡が存在する（第1図）。1983年に山内ストア建設工事に伴う事前調査がおこなわれ、竪穴住居2棟、溝2条、土壙2基、ピット8基が確認されている（堀越1984）。なかでも2号住居覆土からは多数の土器が出土し（第3図）、8世紀後半期と推定されている。

その2号住居からは1点の暗文土師器が報告されている（第2図1）。しかし未報告資料を含めて再整理したところ、他にも複数の暗文土師器を確認した。報告書が作成された1983年頃は暗文土師器に関する研究が進んでおらず、その存在が重要視されなかったことは否めないが、現在では地方出土の畿内産土師器の研究（林部1986・1992）、あるいはそれを模倣した在地の暗文土師器の研究（鶴間2001-2006）が進展し、最近では渥美賢吾（2013）によって茨城県内の状況がまとめられ、畿内産土師器の出土例も僅かであるが確認できるようになっている。こうした研究状況から、本稿では2号住居出土暗文土師器を紹介し、茨城県内の出土例と合わせて若干の考察を加えたいと思う。

2. 2号住居出土の暗文土師器と畿内産土師器

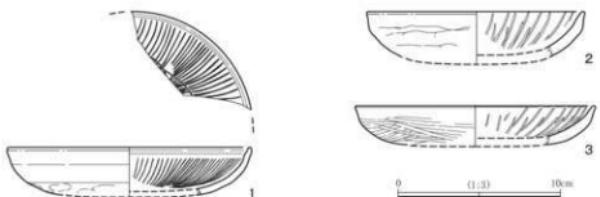
2号住居からは暗文の施された土師器片が10点程度しているが、ここでは反転復元可能な3点を紹介する（第2図）。1の坏は復元口径14.8cm、残存高2.9cmであり、底部から体部外表面がユビオサエで口縁部はヨコナデし、全体に薄手なつくりである。体部は丸みをもって立ち上がりで口縁部が僅かに外反し、口縁部内面に凹線状の沈線をもつ。体部内面は1段放射状暗文を施し、暗文それぞれの位置関係や重複状況から、残存部分の暗文は大きく2部位に分けて施されたと考えられる。なお底部中央にはラセン状暗文の一部が確認できる。胎土は砂粒をやや多く含むが目立つ含有物は少なく精選されており、在地産土師器である2・3とは明らかに異なる。これらの特徴から、この個体は畿内産土師器Cの可能性が高い。なお都城編年（川越2000、西1978）に照らし合わせれば、体部が屈曲せずに丸みを持つこと、残存状況から器高が2.9cmよりも著しく大きくなる（径高指数20～22におさまることから、飛鳥IV～Vに併行する時期の所産と考えられる）。

2の坏は復元口径13.2cm、残存高2.8cmで体部外表面にヘラケズリを施す。体部と口縁部の境に鈍い稜をもち、口縁部はやや外傾して立ち上がり、端部は僅かに外反する。内面には2段に分けて暗文が施され、暗文はやや太くそれぞれの間隔や上端の高さが不揃いで、施し方は1に比べ稚拙である。3の皿は復元口径14.6cm、残存高2.4cmで体部外表面は手持ちヘラケズリ後にヨコ方向ヘミガキを施す。体部はやや丸みを持ち、口縁部は直立して端部が外反する。内面は2と同様、稚拙な2段の暗文を施す。

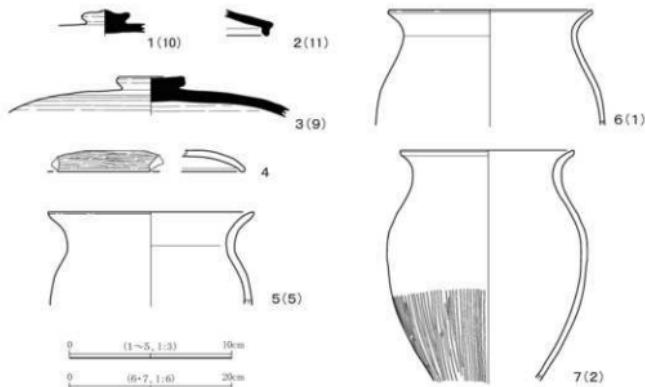
以上が暗文土師器であるが、その他の注目すべき土師器として第3図4の蓋が挙げられる。細片であるため口径



第1図 茨木遺跡(税所屋敷遺跡)と周辺の遺跡



第2図 茅木遺跡2号住居出土の暗土篩器



第3図 茅木遺跡2号住居出土土器（1～3・5～7は堀越1984を再トレース、括弧内は報告書番号）

は復元できないが、残存高1.3cmで形態は扁平なドーム状を呈し、口縁端部はやや肥厚して断面菱形状をなす。天井部外面にはヨコ方向へ密なミガキを施し、内面は丁寧なヨコナデが観察できる。胎土は緻密で精選されており、畿内産土器と考えられる。

3. 考察

前節で畿内産土器壺C・蓋、在地産の暗土器壺・皿を紹介したが、最後に若干の考察を加えたい。まず前者について、石岡市での畿内産土器の出土はこれまでに東成井山ノ神遺跡SI06（曾根2012）で蓋が1点報告されているにすぎず、時期を特定できる資料は今回紹介した壺Cのみで、貴重な資料といえる。

一方で茨城県全体の出土例をみた場合、畿内産土器の可能性が高い資料^[1]は鹿嶼市厨台遺跡群LR18地区SB10出土壺A（石橋・小松崎2007）、神野向遺跡SB02出土壺A（石橋・風間2005）、鹿島神宮境内遺跡出土壺A・壺B・蓋（石橋2012）など、現状では石岡市内と鹿嶼市内に限られる。つまり茨城県の傾向としては、県南の内海周辺に集中することが指摘できるだろう。ただし周辺の状況と比較すれば、霞ヶ浦の南に位置する千葉県の印旛沼周辺では畿内系土器を含め多数出土しており（中島・松本2000）、茨城県とは際立って異なる。こうした状況はむしろ、福島県や宮城県で出土例が僅かであること（木村2000）と類似するが、その意味については不明である。

次に後者に関して、鶴間は常陸の7世紀から8世紀にかけての資料が不足しているため今後の課題としつつも、常陸はいわゆる「新型壺」の特徴^[2]を持つ壺が少なく、供膳具の須恵器化が最も進んだ地域とし（鶴間2001：p.94）、渥美は「新型壺」の不在こそ常陸における土器生産の特質であったと説く（渥美2013：pp.13-18）。しかし

今回紹介した暗文坏・皿のように、畿内産土師器を模倣した土師器は常陸国府の置かれた石岡市で出土することは明らかで、また隣接する田崎遺跡（斎藤・本橋2010）や田島遺跡（飯泉2006、飯田2009、小野2008）では6世紀から8世紀の集落が確認され、7世紀代の土師器供膳具が一定量認められる。すなわち、常陸国全体で供膳具の須恵器化が進むなかで、国府周辺でそうした土師器供膳具が存在することに意味があると考えることもできるが、現状では十分な土器の検討をおこなってないため、その可能性を含めて今後の課題である⁽³⁾。

4.まとめ

ここまで茨木遺跡2号住居出土の暗文土師器の紹介とその意義に関する若干の考察をおこなった。茨木遺跡2号住居出土例は時期比定可能な畿内産土師器が出土しているだけでなく、常陸の暗文土師器を考えるうえで重要な資料である。今後は近年増加しつつある7～8世紀の資料の検討と合わせ、その歴史的意義について理解を深めることが必要であろう。

注

- 1) 畿内系土師器としてはつくば市中台遺跡C区SK03出土高环（吉川ほか1995）がある（澤美2013）。
- 2) 「新型坏」は都城の土師器坏Cあるいは坏Aを模倣した土器で、それまでの古墳時代後期の土器とは明らかに異なるものとされる（鶴間2001・2006）。具体的な特徴としては、畿内産土師器坏C模倣の場合、器形は半球形を呈し、内面に暗文を施すことや外面にミガキを多用すること、口縁端部が小さく外反して口唇部内面に沈線を持つことなどが挙げられる。
- 3) 行方地域の土師器坏には内面を4分割して葉脈状の暗文を施すものが存在する（澤美2013）。しかしこれらは今回紹介した暗文土師器とは異なる施文方法であることから、常陸国内部でも畿内産土師器模倣の様相に違いがある可能性も想定しうる。

引用・参考文献

- 澤美賢吾 2013「常陸における七世紀の土器—その様式変化と史的背景—」『博古研究』第45号 pp.1-20 博古研究会
飯泉達司 2006『田島遺跡（田島下地区）』茨城県教育財団文化財調査報告第253集
飯田浩彦ほか 2009『田島遺跡（三面寺地区）』茨城県教育財団文化財調査報告第311集
石橋美和子 2012『国史跡鹿島神宮境内附都家跡』鹿嶋市の文化財第144集 鹿嶋市文化スポーツ振興事業団
石橋美和子・風間和秀 2005『神野向遺跡』鹿嶋市の文化財第117集 鹿嶋市文化スポーツ振興事業団
石橋美和子・松崎博一 2007『LR18からのメッセージ—肝別遺跡群における湖西産須恵器搬入の様相—』『菟玖波』川井正一・斎藤弘道・佐藤正好先生還暦記念論集 pp.149-158
小野政美 2008『田島遺跡（南光院地区・南光院下地区）』茨城県教育財団文化財調査報告第287集
川越俊一 2000『藤原京条坊年代考—出土土器から見たその存続年代—』『研究論集叢』奈良国立文化財研究所学報第60冊 pp.1-32 奈良国立文化財研究所
木村浩二 2000『東北地方の様相』『古代土師器の生産と流通—畿内産土師器の各地への展開—』奈良文化財研究所
斎藤貴史・本橋弘巳 2010『田崎遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第327集
曾根俊雄ほか 2012『東成井山ノ神遺跡』石岡市教育委員会・ノガミ
鶴間正昭 2001『関東における律令体制成立期の土師器供膳具』『東京考古』第19号 pp.69-115 東京考古談話会
鶴間正昭 2006『畿内産土師器の模倣をめぐって』『法政考古学』第32集 pp.57-80 法政考古学会
林部均 1986『東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器』『考古学雑誌』第72卷第1号 pp.31-71 日本考古学会
中島広顯・松本太郎 2000『関東地方出土の畿内産土師器』『古代土師器の生産と流通—畿内産土師器の各地への展開—』奈良文化財研究所

- 西弘海 1978 「七世紀の土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書Ⅱ—藤原宮西方官衙地域の調査—』奈良国
立文化財研究所学報第31巻（のちに西1986「土器様式の成立とその背景」真陽社pp.93-134に再録）
- 林部均1992「律令国家と畿内産土師器」『考古学雑誌』第77巻第4号 pp.17-59 日本考古学会
- 堀越徹 1984『茨木遺跡地内（山内ストアービル建設予定地）発掘調査報告書』石岡市教育委員会
- 吉川明宏ほか 1995『(仮称)北条住宅団地建設工事 地内埋蔵文化財調査報告書（中台遺跡）』茨城県教育財團文化財調査報告第
102集

報告書抄録

ふりがな	しないいせきちょうさほうこくしょ
書名	市内遺跡調査報告書
副書名	
巻次	第9集
編集者名	谷仲 俊雄
著者名	小杉山 大輔 谷仲 俊雄 齋田 恵一 高橋 透
編集機関	石岡市教育委員会
所在地	〒315-0195 茨城県石岡市柿岡5680番1 TEL 0299-43-1111
発行年月日	2014（平成26）年3月31日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	市コード 遺跡番号	北緯 東経	調査開始日 調査終了日	調査面積	調査原因	主な遺構（時期）
十三稲荷山 塚群	石岡市南台3丁目 1165-1ほか	08205 160	36° 10' 40" 140° 18' 11"	20090413 20090415	60m ²	個人住宅 建設	塚（近世）
要約							
中坪遺跡	石岡市東大橋1493 ほか	08205 092	36° 11' 36" 140° 19' 06"	20100914 20101015	12m ²	市道改良	堅穴住居跡 (奈良・平安時代)
要約							
中坪遺跡における初の本格的な発掘調査である。奈良・平安時代の堅穴住居跡3軒を検出した。検出した住居跡は重複しており、継続的に営まれた集落遺跡である可能性が高い。そのほか、縄文時代前期や弥生時代、古墳時代の遺物も出土している。							

市内遺跡調査報告書

第9集

2014（平成26）年3月31日発行

編集 石岡市教育委員会 生涯学習課

発行 石岡市教育委員会

〒315-0195 茨城県石岡市柿岡5680-1

TEL 0299-43-1111(代)

FAX 0299-43-1117

印刷 株式会社 須崎印刷

〒315-0013 茨城県石岡市府中1-3-16

